

熊本に平和記念館を建設するための

趣 意 書

先の大戦が終わって 74 年、来年は 75 年の節目に当たります。その戦争を体験した者は数少なくなってきました。我々熊本「新老人の会」の会員はその少ない体験者が中心で構成しています。創設者の日野原重明先生（元聖路加国際病院名誉院長、文化勲章受章者）は心から世界の平和を願っておられました。我々はその遺志を継ぎ、戦争のない平和な日本、平和な世界の実現に残された数少ない戦争体験者としてもその使命を強く感じております。

熊本はかつて勇猛果敢な軍団と言われた第 6 師団の根拠地で、正に軍都と称されてきました。当時の戦争の遺跡も数多く残っています。戦争で父や兄や叔父を亡くした遺族も数多くいます。それらの遺品や遺物を一堂に集めて風化しようとする戦争の記憶を後世の人々にも伝えていかねばならないと考えます。

私事ですが、昭和 41 年、未だ国交が回復していなかったブーゲンビル島（パプアニューギニア、当時豪州領）に遺骨収集の団員の一人として参加しました。そこは熊本の第 6 師団の終焉の地、何万とも知れない将兵が戦い、命を落とし、終戦を迎えた地です。2 か月間にわたる収骨作業の結果、彼の地の山河に祈りを捧げ、声なき御霊を懐かしき故里熊本にお連れして帰りました。そして熊本市黒髪の小峰墓地に慰霊の碑を作りました。しかし、国（厚生省）も未だ手掛けている時にこの偉業が実現できたのは、熊本日日新聞社が呼びかけ、熊本県を中心に県下の市町村、財界、遺族会など県民挙げての壮挙だったのです。

その後ブーゲンビル島会として毎年慰霊碑の前で慰霊祭を行なっていますが、既に当時の生存者は極めて少なく、遺族の方々に続けられています。その遺族の方々から父の戦時の遺品を大事に持っているが自分たちも年を取りどうしたらいいか、との問いかけがありました。正に今、これらの戦争の遺品は散逸し、消滅しようとしています。

このほかにも、熊本大空襲の折、熊本市街は火の海となり、逃げ惑う中、被弾したピアノが当時を語ってくれると大事に保存しておられる方もいます。戦争中の生活を知る様々な生活用品、文具、子供のおもちゃなど保管されている方もいます。

ここで、県下のあらゆる人々に呼びかけ熊本市に平和の館を作りたいと呼びかけます。特に、県。市を始め行政はもとより政・財・官・学・民が挙ってご賛同願って熊本の未来の平和のための礎を築きたいと願ってやみません。

戦後 75 年を機にぜひとも実現の運びとなりますように願います。

令和元年 11 月吉日

熊本「新老人の会」代表 小山和作